

ISSN 0289-825X

phenomenon

現象学年報

Jahrbuch der Japanischen Gesellschaft für Phänomenologie
Annual Review of the Phenomenological Association of Japan
Annuaire de l'Association japonaise des phénoménologues

Kai

18

日本現象学会編
2002

λόγος

2002 日本現象学会編

現象学年報 18



- Maldiney, Henri. 1991. *Penser l'homme et la folie*. Grenoble: J. Millon.
- Merleau-Ponty, Maurice. 1962. *Phenomenology of perception*. Trans. Colin Smith. London: Routledge and Kegan Paul.
- . 1968. *The visible and the invisible*. Trans. Alphonso Lingis. Evanston: Northwestern University Press.
- Romano, Claude. 1993. Le possible et l'événement. *Philosophie* 40(décembre 1993): 68-95 and *Philosophie* 41(mars 1994): 60-86.

(小関彩子・おせき あやこ・関西学院大学／龍谷大学)

現象学的無意識について

現象学的なエポケー、点滅そして還元
マルク・リシール (Marc RICHIR)

訳 村 上 靖 彦

1. フッサールにおけるエポケーの概念とそのアボリア：存在論的な構造

〔第一節〕 リシールは、フッサールの現象学が、知覚制度の構造を、別の構造を持つ他の制度にまで一般化して適用してしまうというまちがいをおかしたと指摘する。知覚をもとに構想されたエポケーが、ファンタジーの領域には適用できないことを示すことでフッサールの方法の限界と同時にフッサールのファンタジーの分析の革新性と射程を明らかにする。

おそらく時間を隔てたおかげでフッサール現象学が哲学に対してもだらしだもつともオリジナルな貢献のうちのひとつは、ドクサの役割とそのさまざまな型を明らかにしたことにあると言つことができる（「ここでドクサというのはフッサールといつよりもギリシャ的な意味で、つまり何かについての統覚すべてにつねに含蓄されている〔意見、

註

(1) 訳註：この論考は一九九八年にパリのラエニック病院で発表された原稿を下敷きにして、同年ルーヴアンで開かれた『Deutsche Gesellschaft für phänomenologische Forschung』で発表された。また、さらに修正を加えられて *Phénoménologie en esquisses*, Grenoble, J. Millon, coll. Krisis, 2000, pp.474-486に収められている。本文の縫括弧〔…〕のなかは、訳者による補足説明である。普通の括弧〔…〕は、原文に使われていた場合に、構文構造を明晰にするため訳者が挿入した場合があるが、いちいち断らなかつた。なお長文が頻出するので文章を切り、特に接觸詞的な熟語は文意を損ねない限りで意訳したことをお断りする。

なお翻訳に際しては伊藤泰雄先生（武藏大学）より貴重なご助言を頂いた。マルコリボンティ『フッサール「幾何学の起源」についての講義ノート』邦訳の中に、伊藤先生がリシールの「夢における感じうるもの」を訳出される予定である。又、今回の論文掲載の機会を与えて下さった小川侃先生（京都大学）に深く感謝する次第である。

信念、判断、表象といった多義性をもつ)ドクサという意味である⁽¹⁾。これらの型にしたがつて私たちは対象に關係する。たとえば知覚において現在にある対象、想起における過去の対象、ファンタジーにおける非現在的な対象、理念的思念における過時間的な対象などといった具合である。もうひとつつの貢献は、「自然的態度」と言われるるものの中ではつねに隠されて覆われていたものを、「(知覚された)記憶された、ファンタジーされたなどの)存在意味として、そしてしかじかの対象の在り方の意味の内実Gehaltとして明らかにしたりことである。周知のように、対象の肯定性とそれにまつわるドクサの型への盲目的な関与の括弧入れ・宙づり・エポケーが、対象をこれこれのものとして思念する思念(ノエシス)と、存在意味と在り方の意味(志向的、ノエマ的意味)とを同時に発見し暴露するenthüllenことを可能にするのである(存在意味は、思念されたもの、つまり志向的対象としての思念されたものを、つねに意味をもつた対象にする)。それによつて、静態的なノエシス・ノエマ的連闇において、思念と思念されたものとのあいだの志向的關係の複雑な構造をそのつど構成するものが明らかになり暴露されるse dévoiler⁽²⁾。同時にさらにすんで、意識のなかでの思念行為と志向的意味の諸層のさらに複雑な重なり合いと絡み合い(志向的含蓄)も明らかになる。意識は全体としては単純な構造などもだす、物と世界について意識がなす経験におけるそのような「志向的」連闇の非常に錯綜した織物である、といつひとを静態的現象学はすでに示しているのである。

はじめから⁽³⁾のうちに志向的關係ではなくてドクサのさまざまな構造について語ったのは、ひとつには自然的(日常的)態度において生じる驚くべき自己忘却を強調するためである。そのおかげで、私たち

が関係しているものに意に反していつもすでに捉えられているのであり、それゆえ、私たちはその関係に捉えられた側でありかつ捉える側でもある。それでもうひとつには、私たちをそのつど巻き込むこのよくな捕捉は、主体-客体-表象 vorstellung の構造への古典的な参照が示すもの以上のものをもつてゐるであろうということを示すためである。この第一段階で宙づりされるのが、実在論および觀念論である。そしてフッサールは、(ファンタジー Phantasie におけるものも含めた) Stellungnahmen(態度決定)についてノエシス・ノエマ構造が(彼の語法の意味で)含蓄するすべてのものに対して、すぐにしても注意深い態度を見せるのである。存在と在り方の志向的意味は、一般には理念性やテオリアの志向的意味ではない。ということはその行為においてそのハビトゥスとともに沈殿する意味を創設するStiftung(創設/制度)は、たいていは理念性のStiftungではないからである(そういうのは、特定のはあい、つまり理念化作用があるばかりである)。志向性の(Fundierung[基づけ]を通しての)重なり合いや絡み合いのなかで、学べと導くであらうものを解きほぐすことは、認識批判の企てから出発したフッサールにとって重要な問題になるだろう。そのために、最終的には発生的現象学、つまりStiftungenとその連なりの(個体的そして集団的)全般を通過しなければならないだろう。

このような文脈のなかに据えてみると、フッサール現象学のおそらくもつとも独創的(革命的)な運動は、さまざまな型のドクサの構

(2) 訳註: 訳(6)参照

(3) 訳註: être-ainsi=Sosein: たとえば「幾何学の起源」の用例を参照(Hua VI, S.370)。

造をドクサのエポケーによって白日の下にさらすことであつた。ひとたび括弧入れが遂行されたあとに括弧のなかに「残る」ものについて、彼が語つていてることをすつかり理解するためには、以下の三つのことを理解しなくてはいけない。(一)宙づりが自然的態度に構成的な根源的な眠りあるいは忘却のようなものから、「目覚めさせ」ことである。(二)さらにそれによつて、いかにしで關係のなかで意識が素朴に眠りあるいは忘却しつつあるのかを暴露するといつうこと。(三)すなわち、意識が捉えたと思つてゐるものに捉えられている仕方を、その關係の構造と意味のただ中から暴露するといつこと、以上である。「エポケー」は「魔術的な」操作などではないから、エポケーによつて世界は何も変わらない。そうではなくて、エポケーを遂行することで、できあがつた姿で自分が見いだしてゐるvorfindenと信じてゐるもの(つまり自己忘却している時には、それと私が關係をもつてゐると思ふものの)構成そのもののなかに、知らず知らずのうちにであるにせよまずは能動的に巻き込まれ、含蓄されている、といつことを発見するのである。そして周知のようになしに志向的含蓄のなかで自らが能動的であることを暴露した自我は、素朴に「既存の世界を」見いだすと信じてゐる自我とはもはや同じものではない。これこそ、事物(一般には対象)のなかに自らを見いだすvorfindenしかないムンターンな自我の後ろに隠れた、超越論的構成的自我である。そして究極的にはこれは具体的な基体としての自我ですらある。この基体としての自我は、意味とハビトゥスの沈殿、そして(初期の静態的ノエシス・ノエマ的な分析の極としての)構成的なものでしかないから抽象的な純粹自我からできている。

ハイアガーのように無理して見つけだそつとも思わない限り、こ

れまでのところでは「主觀性の形而上学」や「表象の哲学」なるものに由来する「思弁的な」構造のない見いだせない。広く受け入れられている見解とは異なり、フッサールはこれらの構造のはじめての破壊者のひとりであつた。それ自体として考えれば、ノエマはもはや「表象」ではなく、まさにノエシスの複雑な連闇へと送りかえす意味であり、この意味はからずとも直觀的な Darstellungen(呈示)によつて「充実される」必要は一般にはないである(つまり表象される必要はない)。にもかかわらず、たしかに彼のエポケーの概念、すくなくともフッサール文庫によるフッサリアナの出版以来私たちが知つてゐるようなエポケーの概念のなかには、現象学にとって本質的あるいは必要不可欠なものとは言えないような、ある種の「下部構造」のようなものがある。結局のところ方法的な出発点としてのフッサールのエポケーは、しばらくのあいだ(事物や世界の)経験の進行を、宙づりにすることで、この進行の時間的展開を、ノエシス的思念の側においても、構成されつあるノエマ的意味の側においてもありのままにつかもうとすることがある。そしてこの「目覚めさせ」暴露する捕捉は、すでにちよつと過ぎ去ってしまった宙づりの現在の過去把持のなかで、遂行されるのである。このことは一方では経験の進行は一般に überhaupt 過去把持と未来把持をともなつた生き生きとした現在の連續的な流れのなかで、つまり連續的な時間流(これが、実のところ「絶対的な主觀性」である)のなかで展開するといつことを前提とする。他方では、この進行はそのつど Ur-Stiftung(原創設)によつて創設されている gestiftet⁽⁴⁾といつことを前提とする。原創設はそのつど同時に Urimpression(原印象)あるいは Urempfindung(原感覚)を基点としている時間の展開の連續性の原創設であり、志向的意味を

構成している生き生きとした現在に収斂し、その後関連するハジトウス（意識がもつ、Nach-Stiftung「後創設」によって件の志向的意味を「再活性化」しようとする傾向）とともに、意識のなかに沈殿する時間の統一性の原創設である。経験の連續的な進行を宙づりするこの力によつて、超越論的な「自己」の自己忘却は超越論的なコギトとして、そんなふうに到來するものなかにいつでも jederzeit 提え返されることができる。この超越論的なコギトにおいては、デカルトの言葉をつかうと経験にたいする「信じやすい心」を意識に与えるところのものなかで、意識は自らを取り、押さえる。それによつて、[意識]を取り押さえ自らを取り押さえることの宙づりによつて開かれた超越論的な反省は、（ドクサのをまざまざ構造が盲目的に作動する）自然的な反省とは区別されることになる。

ところでさらに詳しく述べてみると、「下部構造」はフッサールにおいては（いつもではないが）多くのはあい、経験の進行の時間的な連續性（この記述は外的そして内的な）知覚的経験たるこの型のStiftungには完璧に適合するが、不當に一般化されて、意識の生動性全体へと拡張されているということに由来する。念のためにつけくわえると、「それはいつでも」のことはすでにいわゆる「現前の形而上学」を逸脱している。なぜなら時間流は過去と未来へむけて無限であり、つまり「無意識」でもあつて、大部分が現前していながらある。言い換えることの「下部構造」は、いかなるものであれすべての経験を統御することみなされる、知覚的経験のStiftungの無批判的な象徴的優勢によつて、知覚「モアル」を不當に拡張していることにある。

このような〔フッサールへの〕反論に私たちを駆り立てる、しかしまだ現象学の運命は彼の正しさには依存しないと主張するよう駆り立て

るのは、ファンタジー Phantasieについてフッサールが展開した注意深い検討(cf.HuaXXIII)である（紙幅が限られているのでここでは検討できないが、この点については間接的な準現前化の問題系全体を呼び起すこともできる）。実際『第一哲学』第二卷(HuaVII)の第四四講で、ファンタジーのなかでのエポケについて疑似エポケ quasi-époque について話を語ったときに、フッサールは事実上アボリアにいたつている。詳細においては非常に複雑な議論を要約してみよう。まずはじめに確認したいのは、ファンタジー [Phantasie] は想像 [Imagination] ではないことである。想像は物質的な支えに担われた像 Bild 意識や、あるいはフッサールが Phantasiererscheinung 「ファンタジーの現出」となづけたものを基点にしてつくりあげられた、あるいはむしろ一時静止されたイメージの意識である。

(4) 訳註：créance（信用・信任）。人間の信じやすい心を、偽りや疑わしいものがすぐに占領してしまう、という文脈（デカルト『第一哲学』 Descartes, *Œuvres philosophiques, Tome II*, éd. F. Alquié, Paris, Garnier, 1967, pp.404,411）。

(5) 訳註：symbolique：リシールが、「象徴的」という言葉を使うときには、（彼が批判的立場をとる）構造主義的な意味での象徴構造のことであつてシンボリックなメタファーのことではない。リシールにとっては全ての創設制度 institution, Stiftung は象徴的なものであり、つまり文化的歴史的、習慣的な構造化を経ているのである。この箇所は、知覚という制度の構造が様々な創設制度のひな型と考えられてしまうことにつきを言つてゐる。

ファンタジーについてのフッサールの分析の要点は、連関する諸要素の束に収斂する。まず、ファンタジーにおいて「ファンタジーする phantasierend」主体の「自己」は、自己忘却のなかに失われ忘れられる。この忘却は、はじめは今まで見てきたような一般に自然的態度で働いているものと同じ次元の問題に思えるけれども、じつはまったく違う。というのも一九〇四年／〇五年度の講義の分析(HuaXXIII, 58-63)を取りあげてみると、ファンタジーの現出固有の特徴は、その変幻自在さ、多かれ少なかれあいまいではかなく移ろいやすいこと、電光のような blitzhaft 出現と、間欠性だからである。それは時間の連續性をなすであろうすべてのもの（知覚の進行における現出から現出への連續的な繰り越し）に対して断絶している。それに加えて、ファンタジーのなかで知覚された「対象」は現出しつつあるにもかかわらず現在 présent はない。ファンタジーの現出の「感性的部分」であるファンタスマータも（アイステマータ、つまり Empfindungen [感覺] のように）現在はない。そのことを理解するとファンタジーの時間化の「領域」は知覚的経験のそれとは大いに異なるといふことがわかる。それゆえフッサールも何回か言つてゐるように（特に cf.HuaXXIII, 551-552）、ファンタジーにおいて経験された「対象」は、時間流のなかで求められた時間的位置すら持たない。そうは言つても確証される ausweisen 「ファンタジーする」主体があるのだから、フッサール自身が考えたことを超えて以下のことを認めなくてはいけない。つまり、ファンタジーの時間化は現前の時間化であり、抽象などではない指し示すことが可能な現在を矢印した現前 présence, sans présent assignable における時間化なのである。さらにファンタジーの現出はいつもすでに根源的に現前のなかで（現前の、ではない）過去

把持と未来把持のなかにあり、現出自身は決して現在にはなかつたしそうなる必要もない (cf. Hua XXIII, 68, II. 3-4; 84, II.27-29; 86, II.1-3, そこでフッサールは、ファンタジーされたものに関して、非現在的な現出するもの（現在分詞の意味での apparaissant）と語つてゐる)。現在を矢印した現前、それゆえ自らの時間を作りながら自らを作りつつある現前である。この時間はそれゆえまさに連續的なものではなく、生き生きとした現在に収斂することももはやなく、自發的に中断し、行為 acte ではなくそれ自体うつろいやすく間欠的な動き action あるいは能動性 activité に身を任せて再開する。そういうと、もしもエポケーが Zeitpunkt を介して流れの連續性を中断しなくてはいけないのでしたら、このような現在を矢印した現前にとつてエポケーとは何を意味することになるだろうか。

フッサールの功績は、すでに引用した『第一哲学』の講義でそうはいつてもなにがしかのことを試みたことにある。まず、たとえ「ファンタジーする」主体がファンタジーのなかで失われ忘れられているといつても完全にはないといふことを彼は示してゐる。というのは、ファンタジーの空間性は、ファンタジーにおける方向性のゼロ点として

(6) 訳註：être présent は通常は「現前している」であるが、ソレでは「現前 présence」と区別された「現在時」の意味でこの言葉が使われてゐるので、このように訳した。

てのPhantasieleib〔ファンタジーにおける生きる身体〕なるものの志向的含蓄、それゆえ現実世界のなかに含蓄された自我とは区別される Phantasie-Ich〔ファンタジーにおける私〕なるものの志向的含蓄を確認するからである。しかしPhantasieleibはPhantasie-Ichと同じく未規定的なものである(cf.Hua XIII,301)。それをそれとして捉え返すことよりもちろん不可能である。そしてしまつと、知覚的統覚に含蓄されたKörperleib〔物としての身体〕の方から規定し直すことで、変形してしまつことになるだろうからである。それゆえエボケーをファンタジーにまで拡張するため、フッサールは言つなれば「ファンタジーを知覚に見立てた」模造を作る：彼は次のようなフィクションを想像 fingiertする。それによると、Phantasie-Ichがこの〔現実の知覚世界に含蓄された〕自我であるかのようであり（そんなものは「實際には」決して（自分自身には）現在しなかつたしそうなることもないけれども）、もしも自己を却されなかつたとしたら、この自我は、ファンタジーの活動をあたかも知覚的な行為であるかのように生きだであろう、といふフィクションである（これはある種の疑似知覚：「ファンタジーは知覚のよつたな現在を持たないのに」まるで「ファンタジーされた対象」が現在にあつたかのようにみなして「ファンタジーされた対象」を知覚することである）。（ファンタジー固有の時間化ゆえに不可能であつたが）「もしファンタジーが知覚的行為であるならば」この自我

(7) 訳註：リシール自身はフッサールの言葉であるかのように用いているが、フッサールの中に用例が見つけられなかつた。以下のよつたなフッサールの言葉は、PhantasieleibをPhantasie-Ichの代わ

りに使うことを許すように思える。「それ「ファンタジーに関連する自己」は純粹なファンタジーにおける自己であり、無限定的な身体性をもち、無限定的な人格性を持ち、反省によってのみ限定されるようなものである。」(E. Husserl, *Zur Phänomenologie der Intersubjektivität, Band I (1905-1920), Husseriana Band XIII, La Haye, M. Nijhoff, 1973, S. 301)。この点に關して以前リシールに質問したところ、彼の返事は、「おつしやるとおり。私が読んだテクストの中ではフッサールはPhantasieleibといふ言葉を使っていないようです。しかしフッサールがファンタジーにとつてのそしてファンタジーの中でのNullpunkt (=Leib)について語るときには暗黙のうちにそのつじPhantasieleibがあります。」(一〇〇〇年九月一三日付の手紙)*

(8) 訳註：リシールにおいて simulacre ontologique という概念は初期の著作以来一貫して重要である。模造によつて本来実体化できないし存在ですらない現象の現象化が、実体・存在とみなされるようになる。この「存在化」（つまり経験論的次元）という「見たて」、「想像」を介してしか「現象」を思考すること（現象学）はできないといつて不可欠のものである（たゞいま心理學的自我は超越論的自我の模造である）。現象を存在と見なす模造であるから「存在論的」と名付けられる。本稿ではファンタジーを疑似知覚と見なすフッサールの方法に関して言われている。Cf. M. Richir, *Recherches phénoménologiques (I, II, III)*, Bruxelles, Ousia, 1981

(9) 訳註：『第一哲学』第四四講でのフッサールは《als ob》という言葉を強調して繰り返している。

はエボケーによつて（決して存在しなかつたし存在するりともない）その連續的進行を中断することができたであろう。それゆえこれは、ファンタジーにおいてではなく（そこでは何も現出しないのだから〔フッサール的なエボケーはできない〕）、「想像」 fingieren、フィクション、模造における、ある種の疑似エボケー quasi-époque である。そして「ファンタジーする」意識のまわに eidolon 「模造」であるこの模造は存在論的である。といふのは模造が「ファンタジーする」意識を変形しつつ前もつて規定し、そしてファンタジーを疑似知覚へと変換する（つまり今度はファンタジーを知覚的統覚のモデルにしたがつて変形しつつ前もつて規定する）からである。この「知覚」モデルは優勢的で普遍的なものになり、「知覚と知覚以外の」すべての現象の、そしてエボケーあるいは疑似エボケーによるすべての現象化的母胎となつたのである。フッサールが言うのとは異なり、「知覚の志向性に浸食された」想像的なもの l'imaginaire を「ファンタジー的なもの」に付け加えるこのフィクションが、「知覚という」別の志向的關係の構造によつて「ファンタジー的なもの」を変化させることがない」と言うのは正しくない。そしてフッサール的なエボケーの呈示が唯一の可能性であると考へてしまつて、この「下部構造」はアポリアになる。

とはいひ、次のように考えれば事情は全く異なつてくる。ファンタジーの分析とファンタジーのなかの Phantasieleib=Phantasie-Ich の志向的含蓄の分析は、フッサールが残してくれたもつとも特筆すべき現象学的分析のひとつである。そしてこの分析はこのような「模造製作」などにはからずしもよりらず、知覚的志向性のすべての構造の真の苗づりによる。このことがフッサールに非常な困難を課し、彼を疑似知覚という不明確なものへと陥らせることがあるのである（まるで「フ

アンタジーされた」対象が現在にあるかのように。そういうふうじえで、変容が知覚における非変容と同様の根源性をもつとしても、「あるかのように」は「変容」による渦りをもつことになる）。そうすると、これらの分析においてエボケーはどこで生起しているのか。すくなくともその含蓄的な現象学的身分はいかなるものか。現象学的な意味が知覚的統覚とその構造の Stiftung によつて受けた刻印から逃れることを、まさにエボケーが許し、すくなくとも見かけ上のアポリアに陥らせるほどである、といつことを勘案するならば、エボケーは知覚的統覚には依存しないで、それを超えてゐるのであると言わなければならぬ。ただしこのことは、他の型の Stiftung、つまり他の型の時間化をともなう他の型の志向的構造へと開かれるなどを可能にするかぎりにおいてである。そうなるのは、この刻印（結局のところ、すべての現出とすべての現象の超越論的な母胎である存在論的模造の刻印である、絶対的主觀性としての時間の絶対流の刻印といふ刻印）から解放されたエボケーが、実際には志向的關係それ自身に対し効力を持つ得、現出と現出者をさまざまなもの Stiftungen、つまり意味と志向的な構造に捉えられることができるものと考えることになるからである。しかし、このことは現象学的遷元がその十全な意味をもつといつことを含意する。つまり現象以外の何ものでもないものとしての現象

(10) 訳註：tout phénomène。以下の議論からわかるとおり、リシールにとつて「現象」は本来複数的なものであり、一者にまとめることはできない。翻訳では煩雑なので「諸現象」とは訳さなかつたが、基本的に「現象」は複数形であるし、ここでの用法のように単数形の場合でも明らかに複数の現象を含意している。

phénomène comme rien que phénomène／の還元であり、これが意味するところを私たちは明らかにする責務を負っている。

2. 誇張的な現象学的エボケーと現象の現象学的点滅

〔ここからリシールは志向的对象の現出、現象の仮の見せかけであり現出に固定する前の段階である仮象、非志向的な現象の点滅という三段階の身分の間の連関を考察してゆく。誇張的なエボケーが現出をかっこに入れ、仮象と現象をかいま見せせるのである。〕

古典的な（あるいは「標準的な」）フッサールの現象学的エボケーが、対象とともに与えられるさまざまな型のドクサを、その構造を分析するためには取りし suspendre 取り押さえる *surprendre* ものであるのに対し、私たちが提示する（「非標準的な」）現象学的エボケー（これをあともから明らかになる理由ゆえに、誇張的な現象学的エボケーとなづける）は、じかに現出と現出者とを、志向的諸構造それ自身を宙取りし取り押さえることにあり、それによってそのつどこの諸構造それぞれに固有の Stiftung の型を取り出し、かつ現象以外の何ものでもないものとしての現象と私たちがなづけるものへと接近しようとするとするのである。そうすることでフッサールの思想の真の作り直しを提案していく。しかしそうはいつても現象学にとどまるのであり、フッサールの分析と現象学的エボケーの遂行が含意するものをフッサールを超えてラディカルに押し進めてゆこうとするのである。フッサールがつねに主張していたように、現象学を「できあがつて固定した」学説と捉えてはいけない。そうではなく問いかけ interrogati-

tion の方法をもって追求してゆくべき問題 problèmes と問い合わせ questions の集合として捉えなくてはいけないのである。

現象学的エボケーを志向的な關係と構造それ自身に対してまで実行し拡張するといふことは、次のような二つのことを同時に意味する。

(1) フッサールにおいてはいつもすでに志向的な關係、構造そして意味に捉えられているあらゆる現出（知覚、想起、予期、ファンタジー、感情移入、など）はもともと原初的な建築術的段階においては等価である。その段階では現出はもはやアリオリにしかじかの現出者の現出 apparition de l'apparaissant としては現出する apparaître などがな

い。そうではなくて〔はかなくうつろいやすい〕仮象 *apparence* として、仮象以外の何ものでもないもののように見える paraître、つまりある種の（アリオリには運営していない根源的に拡散した）それ自身以外の何ものにも送り返されない）原初的な現象学的ヒュニーのもうに見えるのである。（フッサールがあまりにも考慮していない）デカルト的な誇張懐疑に依拠して、誇張エボケーが問題になる。このエボケーはすべての自明と見える paraître ものを宙取りしながら、ある種の根源的な「仮想 feinte」によって、すべての見えるものを、ある種の多かれ少なかれ一貫した夢のようなものと考える。すでに或る型の Stiftung に由来してしまっている像意識ではなく「野生の」つまり「手綱を解かれた」ファンタジーの「領野」に近いものとして、考えるのである。一見すると、私たちは、フッサールにおける世界の消滅の仮想とは（たしかに隣り合っているけれども）異なるこの仮想によつて、非一貫性、非存在の影にいたる。Fingieren は「ファンタジーを疑似知覚と見なすフッサール的」「想像」と言うよりもむしろ〔逆に知覚を夢のようなものと見なすデカルト的〕仮想と捉えられ、フッサールの Fingieren とは対置されるのである。

(2) 「誇張エボケーを遂行するとは」同時にこれらすべての仮象のいかなるものもアリオリには、「私自身・私たち自身・知覚された・記憶された・予期された・ファンタジーされたなどの世界には固有な形では由来しない」と考えることである。つまり仮象を超越論的な主体（フッサール）や現存（ハイデガー）に關係づけることは、「現象を存在に見てたる」存在論的構造固有の構造のなかに入ってしまうということである。この構造は（構造（超越論的錯覚）の構造そのものからして）志向的構造そして一次的には配慮の構造によって、仮象に

(11) 訳註：建築術という言葉はカントに由来するが、リシールの場合、現象学的な源泉的次元 (arche) についての探索 (techtonique) という意味がある。最終的には、現象以外の何ものでもないものとしての現象の次元から、様々な制度が創設される発生の構造と、諸制度の差異化の構造のことを「建築術」と呼ぶのである。

対して存在（あるいは非存在）を割り当て、そして何よりもまず自分自身に対して、存在を割り当てるよう見える（あるいはそれ自身との差異において、存在への脱目的な開けとして自らを定立するのである）。それゆえ、この「エボケー」の考證ではハイデガー的な意味で「根本的な」ものであれすべての存在論は、この現象学的な「原始性」の建築術的段階においては、構造の「結果」なのであり、それに乘じて、言つなければ個体化されたものとして、つまりここでは哲学する個体的主体としての主体の Stiftung が作動するのである。

この種の根源的で誇張的な仮想なるものはフィクションしか作らな

(12) 訳註：「仮象 *apparence*」と「現出 *apparition*」の対比、「見える paraître」と「現出する apparaître」の対比についてリシールに質問したところ、以下の答えを得た。「apparence=（カント的）Schein’ paraître=scheinen (ニ), apparent=scheinend (こくに erscheinen) とその派生語ではないことに注意）。点滅する（ドイツ語で pulsieren）がゆえに人は決して現象以外の何ものでもないものとしての現象を見る（とも標記する）こともできません。点滅の中での仮象をかいま見る entreapercevoir [かいま統覚する] が、仮象が仮象であるのは、これこれの現象の仮象（=見せかけ）であるからではなくて、点滅の一瞬のなかでの現象の非限定期で図式化する塊の仮象だからです。たとえば、わたしたちは景色（=世界）を本当の意味で見る（）ことはできません。見るのはそこで「踊る」仮象である。この仮象はものの現出であると同時にファンタジーの現出でもあるのです。音楽（音ではない）についても同様のことが言えます。」(一〇〇二年五月七日付の手紙)

いものだと人は言うかもしれないが、しかしながらアカルトにおいてはまさに悪い靈のフイクションに抗して、仮想がコギトのなかで確立するのである。仮想こそが仮想をする者にたいして現実存在の事実的な確かさを保証するのだ（これはたいていのはあい人が気づいていたかつたことである）。しかしアカルトにおけるように、このことが現象学する主体のコギトと、（純粹な）フイクションから隔たった内容を欠いた事実性において）そのコギトの現実存在の場所を保証するだけではない。さらにこのことは仮象を一つの身分のあいだで漂わせる schweben：一方で、仮象 appearance は、志向的意味のしかじかの Stiftung の媒介によってしかじかの志向的構造のなかに捉えられることができるような潜在的な現出 apparition という身分をもつ（つまり一方で仮象は志向的現出へと回取される）。他方で、仮象は、別の「規則」、原則として、受動的結合と連合の規則によって別様に整理されうる仮象という身分をもつ。後者はつまり創設された現実世界とは異なる諸世界の仮象、あるいはむしろ何ものでもないものとして、現象以外の何ものでもないものとしての現象の仮象である。これはそれゆえ物や対象やすべにしつらえられた秩序など現象そのものではないものについての現象などではない現象、つまり現実的なもの・ファンタジー的なもの・現勢的なものなどといったものを超越する現象である（つまり他方で仮象は志向性以前の現象に向かう）。とはいへ現象は同時にこれらすべてのものにも見える paraître、ただし（アカルトのコギタチオネスとは異なり）起動相におけるものとして、そしてこれは建築術的にはすべての意味、志向的意味の Stiftung に先立つ「野生」においてである。誇張的現象学的エボケーが開かれているこのような状況は、私たちが現象学的点滅となづけている状況であり、私たち

にとつてはまさに「」に現象学的、現出と消滅のあいだで点滅する現象への還元がある。実のところ（志向的意味の時間化と空間化に関するすべての規定された Stiftung の背面で）仮象はそれ自身のあいだで作動するのであるから、不安定性、はかなさ、動搖のなかで、現象以外の何ものでもないものとしての現象の領域それ自体へと自らを関係づけようとする。仮象はその領域から、そのつど根源的な複数性のなかで、現象性の見せかけのかけら lambeaux apparents として現出するのである。そうすると、星の点滅という比喩を使うとすると、仮象は現実存在する支えを失った光のように見える。しかし他方でそれに関連して、まさに不安定性と対応して、仮象はつねにあれこれの志向的構造に取り込まれる間ににある。つまり現出へと切り取られ、（括弧入れの括弧のなかに確かに残っている）すでに創設された gestifftet しかじかの志向的意味を直観的に充実する現出となる。そうすると、現出という身分へと移行するので、（またしても比喩的に）「星」の点滅を使うとすると仮象・現出の「光」は現実存在する

(13) 訳註：schweben はファンタジーの特徴としてフッサールが用いた言葉。あとで仮象とファンタジーの類縁性が明らかになる。

(14) 訳註：リシールは志向性以前の意味を自生する意味 sens se faisant と呼ぶ。この意味の領域が「現前」であり、今問題になつてゐる現象の領域は現前すらしない超越論的地平である。註(18) 参照

(15) 訳註：こゝではまだ現出を括弧に入れた次元なので、「現出する apparaitre」ではなく「見える paraître」の間違いではないかと思う。

（16）訳註：田中美知太郎訳では、「忽然」、「たちまち」となつてゐる。めまいにもかかわらず、私たちが語っている統御し得ない、よつてどうぞじこりのない反転は、唯一ではあります根源的に複数のものである。それゆえ反転にとりつかれた点滅は単数形ではなく、複数形において活用るのである。それゆえ仮象の、仮象という身分へむけての点滅と、現出という身分へむけての同じ点滅も同様に複数である。ところで、仮象はつねに「塵のうちに」仮象という身分へむけて複数で拡散しつつ点滅する。なぜなら現象（仮象は現象の現象性のかけらに見える paraître）がそれ自身も必然的にもともと、現象の起動相における真の複数性であり（このことを私たちは暗黙のうちに前提としてきた）、一者などではないのである。さらに現象化へむけて自生する仮象のはかない集約／拡散が一瞬のうちに反転する「戯れ」は、（建築術的な視点でみると）さらに原始的な仕方で、現象化

源泉（仮象がそのなかで意味をもつことになる Stiftung）から発せられたかのよう見えるのである。しかしながら、諱張エボケーの領野においては、「この〔現象が現出の Stiftung へと固定される〕運動は、はじめの〔現象それ自身の点滅〕運動と同じくらい不安定なもののように見える paraître。まさにそれゆえに、「志向的現出と非志向的現象」という、一つの極端な極のあいだの点滅、ひとつの極からもう一方への統御し得ない反転に核心においてとりつかれた点滅、が問題になるのである。この点滅は『バルミニテス』〔156D〕におけるアラトン的な瞬 eaiphnes によく似ている。アラトンにおいては、「これは不安定な仕方で一者を運動と休息のあいだで反転させるものであつた。そこからやはり帰結することとして、この時間を失いた、それゆえ過去把持と未来把持とともに時間化する生き生きとした現在（これがフッサールの前提、「下部構造」であったが）からアприオリに外れた、一瞬の反転が誇張エボケーの核心なのである。そこではすべてが反転し、何ひとつ自明のものではなく、現出はすべての（すでに創設されて）あらかじめ想定された現実から身を引き剥がすが、しかしながらそれでも何かがそこにはある。たとえば、春のそよ風のもとでの木の葉のざわめき、ランボルが「太陽と溶け合う海」であり永遠でもあると呼んだもの、（ただし形而上学的なものではなくて、現象の現象化としての現象学的な点滅が時間から外れ、語りから外れているといつて）がそうである。私たちみなが知つてゐる一瞬であり、そのためには現象学者などである必要などない。しかし私たちがかいま見てゐるような現象学は、ある種の（意志的な）固有の想起法によつて、方法的にこれを利用しなくてはいけないような一瞬なのである。

つまり、（とくに）アラトンの『バルミニテス』への言及により起き

(16) 訳註：田中美知太郎訳では、「忽然」、「たちまち」となつてゐる。この場合は時間流の中の現在時としての瞬間 instant, moment と対比される、時間からはみ出る「一瞬 instantané」が問題になるのでこう訳した。形容詞や副詞の派生語は「一瞬のうちに」などと訳した。

(17) 訳註：リシールは《la mer allée avec le soleil》と書いてあるが、実際には《Elle est retrouvée. / Quoi? l'éternité. / C'est la mer mêlée / Au soleil.》（《Délires II》 in *Une saison en enfer*）である（Rimbaud, *Oeuvres complètes*, Paris, Gallimard, coll. Pléiade, 1972, p.110）。

の原空間化／原時間化する図式論に従つて自生するからである。この図式論は、志向的なStiftungによつて現出が手なすけられ分割される仕方とは異なるnon congruente仕方で、仮象を「連合」させるのである。しかしこれはフッサールによつては想定されていない深みにおける「連合」、「受動的総合」である。というは、この「受動性」は創設されたgestiftet意識にとつてのみ受動的なのであり、それゆえ、文字通り無意識的であり、すくなくともほとんどの部分はそぞらからである。このような連合と受動的総合は、現象化的図式論の（二瞬のうちに停止へと反転して、同じように一瞬のうちに「再出発」しうる）運動性の、つねにはかなく不安定で移ろいやすい果実なのである。この図式論はそれ自身本来的に現象学的である、というは原則からしてすべてのStiftungから解き放たれているからである。点滅の逆側の極、志向的構造に捉えられる現出の身分へとむかう仮象の極においては、可能性の限りをもつてこの構造自身が点滅するが、だしこのはあいは志向的意味のアリオリに多様なStiftungenの構造として捉えられている。それゆえそこから、今度はフッサールが発生的現象学として意図していたものをさらに先に、つまりStiftungen的同时に形相的で歴史的な連なりより遠くまで押し進めることができる。そうすると固定された様相の発生としての志向的なStiftungの、さまざま大型の発生そのものに直面する可能性が開かれてくる。これがStiftung、つまり私たちが象徴的制度／創設institution symboliqueといつゝことで理解しているものの、つまり安定した「対象」との志向的な関係に私たちをおく志向的意味の時間化と空間化の、謎である。点滅のなかで現象以外の何ものでもないものとしての現象へと自らを関係づける傾向をもつ仮象という建築術的段階から、ある型のStiftungによつて志

向的意味へと関係づけられる現出という建築術的段階への移行は、変形を伴う移行であり、これを私たちは建築術的変換と呼ぶ。といふのはこの移行は断絶を伴うものであり、ひとつの段階から他の段階への移行に際しては、いかなる論理的・形相的「演繹」もないであり、いかなる連續的な派生もないからである。自分自身に対しては盲目的で、匿名的であるいはフッサールのように言つならばfungierend〔作動しつつある〕、この建築術的変換に対して、私たちが建築術的選元と呼ぶものが対応している。これはStiftungの言うなれば純粹に現象学的な「糧」をつかむことである。この糧はフッサールの言葉で言えば志向的関係においてつねに過剰なもの、そして志向的関係に対して無限に過剰なものである。糧はそんなふうに変換を経ても〔創設さ

26

(18) 訳註：schématismeはもちろんカントに由来するが、リシールにおいては、彼が受動的総合の第三段階と呼ぶもつとも原始的な原現象化の次元の「構造」「秩序」を示す言葉である。この次元に現象の原時間化／原空間化が対応する。この段階の現象は意味とならないがゆえに、意識に現前する」こともない。いわば闇としての超越論的地平である。ちなみに第二段階は「自生する意味 sens se faisant」の現象化の段階で時間化／空間化・現前が対応する。第一段階はハビトゥスの段階である。Cf. M. Richir, *Méditations phénoménologiques*, Grenoble, J. Millon, coll. Krisis, 1992: 註(2)も参照。

(19) 訳註：déformationは、メルロ・ポンティが『シニユ』の中で引用したマルローの言葉déformation cohérenteに由来している。リシールは建築術的変換の同義語として使つ。

れた志向的意味の」背後あるいは足下から、意味のいつまでも不分明な部分を形成し、現象の生々しさあるいは生動性のようなものを意味に与えるのである。誇張的な現象学的エポケーは実際そのようなものなので、抽象を行わない限り一方の点滅の極が他方の極のなかで消え去るといつゝではない。というはつねに画者は、一緒に、一方が他方のなかであるいは外で動かすからである。確かにフッサールにとつてそうであつたように、現象学的分析はある程度まで抽象的な固定によつてすすむことを余儀なくされるが、これが現象学的分析でありうるのは、この停止が生き生きとした現在における停止ではなく、反転の時間的二瞬における停止であつて、（現象の原時間化／原空間化によって、アリオリに論理学や形相性の外において起動相的に開始される）さまざまスタイルの時間化と空間化とともに、すぐさま点滅の複数性のなかでふたたび運動に放り込まれる限りにおいてである。

これらすべてについて、現象以外の何ものでもないものとしての現象は、一般的な意味での私たちの感性や思考には接近不可能であるよう見える、といふ結果がでてくる。それゆえこれを「白紙の現象」とつなづいたこともある。通常の意味では、それは見えない、感じることのできない、思考することのできない、ひとことでいえば、それ、自体としては現れないものinapparentである。厳密な意味での現象＝学は現象の現象化的図式論として、ハイデガーのように現れないものの現象学のようなものへと転ずるようにも見える。しかしながらこの考え方においては、ハイデガーにおける存在の「一元論」とは異なり、「つねに複数である」現象を、「一者たる存在」なるものへと圧縮する」とを許すものは何もない。（Stiftungは、現象学的な根柢Grund [いし

ての一なる存在] はもたないけれども「複数の現象」という）源泉Ur-springはもつて、それ自身から立ち上がるるのであるから、存在のなかへと規定するものは何もないばかりでなく、現象の無限で起動相的な複数性のなかには何ひとつアリオリに規定されたものなどない。現象はその無意識的未規定的な貯蔵庫である複数性自身の内側で無限に増殖するのであるが、（さまざま大型のStiftungenの非連續的あるいはper hiatus〔断続的〕な発生を導き手に）意識を創設するstiftetものによつて隠され覆われもする。この意味で、現象は「ユートピジア的「場所を持たない」」である、といふのは現象それ自身については、私たちのいる世界の場所と関連づけて指し示すことができる「場所」はないからである。その図式論的な連鎖については、可能な「トボロジー」はない、といふのは、現象のなかには点（中心）も隣接もないからである。たゞそのつど現象のなかで開かれるものが、その現象化のなかでそのつど或る世界の切迫であるとしても、それは私たちがいつもすでにいる世界とは別の世界なのである。

それならば正前に、「どうしてこのような現象学がそれでもまだひとつつの現象学であるのか」と問うことはできるだろう。といふのは経験による実行、フッサールにとつて重要なAusweisungが（すくなくとも点滅の純粹に現象学的な極においては）問題根ざるところになるからである。もし、このように現象学を作り直しをしようとする考え方

現象学的無意識について

(20) 原註：この重要な指摘はデサンティによつてなされた〔J. T. Desanti (1914-2002)はコルシカ島出身なのでイタリア風名字。Réflexions sur le temps, Paris, Grasset, 1992やPhilosophie : un rêve de flambeur, Paris, Grasset, 1999などがある〕。

27

のなかにAusweisung「確証」があるとしても、これは間接的なものでしかないが、ここで結論の代わりに一つの方向での可能性を示したいと思う。

(1) ひとつ目は、迂回によってファンタジーの現象学に到達する方向である。まずははじめに、誇張エボケーの核心は、習慣的な志向的関係のすべてを時間の外で一瞬宙づりにすることであり、フッサールのエボケーを時間性の連續主義的な考え方から引き剥がすことを可能にする。このもう一つの誇張エボケーはそれ自身点滅のなかにあり、それによつて仮象の、現象のなかでの点滅、つまりその現象性の見せかけの具体性としてexaiphnēs〔一瞬〕における仮象から現象へ、現象から仮象への一瞬の複数的な反転を、いわば「目覚めさせる」。現出から仮象は身を引き剥がし、その多様な粉々の点滅は（はかなく移ろいやすい仕方で集積しながら式化する現象化のなかで）現象性のなかでの現象のきらめきを構成する。そうすると、たとえ、つねにすでに現象学的に原初的な仕方で起こつたものとして（それ自身レミニサンスのなかにある）統御し得ない（だれにでも非意志的に生起する）誇張エボケーの想起のなかで、「現象学者によつて」エボケーが方法をもつて実行されたとしても、誇張エボケーはそれ自身不安定である。この方法は起つていてることを「見るtheorein」ために持続的にそこに「身を置く」ことを許さはないが、ある種の漂う視線へのハビトゥスを創設stiftenする。つまり現出の背後にある仮象を固定することはできないものの、漂わせるschwebenのような現象学的視線である。固定することは仮象を即座に盲目的に（感性的、ファンタジー的、思考可能な、などの）現出へと変換してしまうであろう。いずれにしても、現象の間にあつて統御も予測もできない仮象の「戯れ」のよう

なものが、ファンタジーと夢の一見すると手綱を解かれた戯れの一つつまりファンタジーにおいてはあらゆる志向的思念から自由であるように見える「連合」の背後のどこかで漂つている。確かに、ファンタジーのなかでは、いつも何か多かれ少なかれ規定された何かを経験していると信じるドクサがある。しかします、ファンタジーの夢幻自在で、はかなく、移ろいやすく、blizhaftで間欠的であるという性格が、ファンタジーにおいてあるものを直観的なDarstellungのなかで正確に標定することを事実上不可能にする以上、私たちが言及したこの「規定」はつねに問題をはらんでいる。さらにファンタジー（たとえば夢）でおこなわれる「連合」は覚醒時の連合には一致しない。以上二点にくくえて、フッサールがたゞ主張したPhantasiewelt〔ファンタジーの世界〕の実在real世界にたいする遷元不能な距離がある。これがPhantasieweltを現象にむけて点滅する仮象の非実在Irrealitätの側へと引きつけるのである。点滅の純粹に現象学的な極とStiftungとにとりつかれた極のあいだにある距離というさらに深い距離が意識に残したエコーとして、私たちはこの距離を解釈する。Phantasieweltにはいわば仮象と、現象以外の何ものでもないものとしての現象との領野にもつとも近いものであり、それゆえ後者の現象学的な現実性Wirklichkeitに確証を与えるものである。それゆえPhantasieweltは、Stiftung以前の野生で原初的な現象学的領野と私たちがつなげるものの間接的な確証なのである。StiftungはここではますやくイメージのStiftungであり、これがまさに現在として流れのなかに身を置くことのできる瞬間のなかで、ファンタジーの現出を、「認識可能な「対象」のよう」何かの現出へと固定するのである。そして誇張エボケーは、像意識の志向的構造を担うイメージとして仮象が固定され分割され規定されてしま

わないうちに、仮象をその本源的な未規定性のなかで戯れるに任せ漂うがままにしなくてはいけないだろう。雲のなかに竜の姿をすぐさま見いだすと信じるように、雲のなかに雲以外の何ものでもないものとしての雲が、雲の中の別の形や別の配置の点滅とともに漂うに任せなくてはいけない。それゆえファンタジーと夢は、その素早く、動きやすく、はかなく、移ろいやすく、突然で間欠的な戯れによつて、もつとも原初的な建築術的次元における現象学的領野の間接的な特権的なAusweisungを構成するのである。つまりファンタジーする意識の模倣あるいはeidolonに対する疑似エボケーよりもはるかに、誇張エボケーの含蓄的な「暗黙の」作動によつて、フッサールは非常に驚くべきそして非常に繊細なファンタジーの現象学へと開かれたのである。

(2) 二つ目の方向はさらに突飛である。というは現象化の図式論のなかで戯れているものそれ自身に向かうからである。この図式論が現象以外の何ものでもないものとしての現象のフレームあるいは骨組みになるのは、すでに言及したように、原時間と原空間を作る限りである。この原時間と原空間は時間以前の複数の「時間」であり空間以前の複数の「空間」であり、「仮象と現象」の点滅のさなかでの一瞬の反転の（それ自身点滅する）式化のなかで作られる。つまり現象の図式化のなかではじめて「現前」という時間化が生まれてくるわけだから】このときすでにあらかじめ、（まずは指示示すことが可能な現在を矢いた現前において時間化する時間の）現前Anwesenheitと、「すべて同時に」の空間の延長線上にある現前の「同時に」あるいは「同時に」のなかで、そこにあるものすべてのsimulとしてのUmweltがあるわけではない。これが意味するところは、根源的な複

数性のなかで、現象以外の何ものでもないものとしての現象は連鎖し、しかしながらその未分化のせいで重なり合う（分化はつねに一瞬のものでしかなく、一瞬めまいがするほど速くと同時にあまりにもはかないしかしかかるきらめきのなかで私たちに対する見せかけでしかない）。さらにこの未規定的な重なり合いのせいで、「それ」現象性のかけらを「それ」固有の仮象として見せるためにその固有の現象性において自ずと反射するような、ひとつの現象というものは決してない（或る仮象が一対一対応で或る現象に結びつくことはない）。つまり「その」現象の特性の支えあるいはヒュボケイメントとしての現象個体（アトム）なるものはない。このような高度に逆説的な状況のせいで、すべての仮象、すべての現象性の見かけのかけらは、原時間化／原空間化のなかで絡み合つた現象の複数性の痕跡を未分化にもつ。しかしながらすでに述べたように、この複数性は意識の現前になつたであろうものなかで、それとして標定されたり認識されたりして、

(2) リシールからの手紙による註釈：「現象化の図式論の中には、原時間と現空間の無限の複数性があります。これは原存在論的なものによる連續化「以前」（「超越論的な以前」）です。原存在論的なものとはその中で図式的なものが（完成すること無しに）反省するところのもの（＝自己）です。Phénoménologie en esquissesの最後のセクションを参照：「あらゆる」現象化において、全ては「そのつど」ゼロへと返されます。最近出版したInstitution de l'idéalité [Beauvais, Association pour la promotion de la Phénoménologie, 2002] の最初のセクションでもこれを説明しました。」(二〇〇一年五月七日付の手紙)

しまいには記憶できるような身分にからなくてはいけないわけではない（一瞬は過去を持たない）。また、平行して、シェリングの言葉によればそれ自身unvordenklich 「あらかじめ思考不能」であり、マルティネの言葉によれば超受容的で超可能的であるこの同じ複数性は、予測可能な未来のなかで意識の現前になるはずであろうもののなかで、それとして予期しうるといふことはない（一瞬は未来を持たない）。しかしながらここで建築術的段階においては、それ自身は時間外にある反転の一瞬の原時間化・原空間化しか問題になりえないでの、未來把持と過去把持をもつたフッサートル的な現在に頼ることはできない。それゆえ、原時間化は、（現在を前提としない、さらには（指示する）ことのできる現在を欠いているのに自身の過去と未来をそのなかにつねにすでにもつている）現前をすら前提としない）時間の超越論的な諸地平の一瞬でなくてはいけない。それゆえ一瞬と同じ建築術的段階の時間の諸地平（つまり一瞬の属性あるいは地平として考えられたり把握されることがあり得ない諸地平）が必要である。このような諸地平は、決して（すくなくともアリオリには）現前のなかにはあつたことのない現象の、昔からずっとそしてこれからもずっと記憶し得ないような超越論的過去の諸地平と、決して（すくなくともアリオリには）現前のなかにあつてはいけない現象の、いつまでも機が熟していない、いもうな、超越論的未来の諸地平である。それゆえ（原時間化であり原空間化である図式化につねにすでに捉えられている現象の、アリオリに未規定的な複数性の現象性の見かけのかけらとしての）仮象以外の何ものでもないものの仮象の純粹に現象学的な性格は、同時に超越論的過去の超越論的レミニサンスとして、そして超越論的未来の超越論的予感として見えるといふことであり、つまり同時

にすべての思い出よりも遠くから到来するので、永久に記憶し得ない、ものであり、かつすべての予期よりも遠くから到来するのでいつまでも機が熟していないものとして見えるといふのである。これが私たちにとつて経験すればそれにおける一瞬の原時間化されたバージョンであり、これがランボー的なそしてソシでは超越論的現象学的な永

(22) 訳註：Schelling, *Sämtliche Werk*, Bd. XIV, S. 337-355, M. Richir, *L'expérience du penser*, Grenoble, J. Millon, coll. Krisis, 1996, pp. 210-249

(23) 訳註：マルティネ(1911-)はテサンティヤリクール(1913-)とともにフランス現象学の長老。芸術論や精神病についての現象学的考察で著名。Cf. H. Maldiney, *Penser l'homme et la folie*, Grenoble, Jérôme Millon, coll. Krisis, 1991, et L'art, l'éclair de l'être, Comp'Act, coll. Scalène, 1993

遠のように見える。これのせいで、時には（ベルゴットの黄色⁽²²⁾）に）しかじかの色、しかじかのStimmung、しかじかの風景などを、どこからともなくじりへもなく私たちに出現させるように見え、私たちのもとも内奥の深みへとなぞめた仕方で私たちを回帰させ、「神的な驚き」のようにも感動させる。さらには私たちの年齢や人生の偶発事から引き離し、到達し得ないもののノスタルジーSehnsuchtのようなもののかなにあるように、私たちは決して老いなかつたし老いるはずも決してないという印象を与える。そこから死が、それだけではなく生や人生が全輪郭をもつて際だつてくるのである。それゆえあたかも私たちはまだそしてずっと、世界の、あるいはかい見るのがやつとの複数の世界の、边缘にあるにすぎないかのよつなのである。確かにこれは何人かの芸術家の特権的な経験であるが、だからといつて現象学固有の身分を持たないわけではない。この身分とは現象の原時間化／原空間化と、それが単なる思弁的な構築ではないということによって、フッサートルとフィンクがうまく「現象学的再構築」となづけたものを確証するという身分である。

エボケーの、私たちが現象学的に誇張的となづけるエボケーの、時間の外における、一瞬における宙づりについて言えば、おそらく私たちに可能な条件のもとも計り知れない誰のうちのひとつである。時々にせよ、しかも時間や根源的な時間化よりも遠く、世界、事物、時間から身を引くことができるといふを、これらのものに完全には捕らわれないといふを、これがおそらくもつとも深いところで私たちを動物から区別するものである。どのような秩序や力に由来するにしろいかなる必然性もこれを説明したり廢棄したりすることはできぬいたう。だとこそ存在としての存在であつたとしても、このさまを存

在のなかに据えることは、回復不能な仕方でこのさまを凍り付かせることになるであろう。

Marc RICHIR (アリュッセル自由大学)
翻訳：村上靖彦（日本大学）

(24) 訳註：ベルゴットがフェルメールの「デルフトの眺望」を見ながら死ぬ場面。「やつとフェルメールの絵の前にきた、その後には、およそ知っているどの絵よりもはなやかで、他とはかけ離れていたという記憶があつた。しかし彼は批評家の記事のおかげで、いまはじめて、青い服を着た小さな人物が何人かいること、砂がばら色をしていることに気がついた、そして最後にはんの小さくでいる黄色い壁面の見事なマチエールに気がついた。めまいがひどくなつてゆく、彼は子供が黄色い蝶をつかまえようとするときのように、見事な小さな壁面に根線をしげりつけていた。」（ブルースト、『失われた時を求めて』、第五編「囚われの女」(1922)、井上完一郎訳、ちくま文庫、pp.321-322）